

Review: 心の在り処

Presenter: 白井 東 (所属: 日立製作所)

Lecture title: 私と“心理学” ~もうひとつの心理学~

Review:

白井氏の講演は、実験室で実験を行う伝統的な心理学を生態学的妥当性の観点から批判し、より日常生活を反映した考えを取るべきとの主張から始まった。白井氏は、モノが我々に認知を与えるというアフォーダンス理論を例にとって説明した。そこから浮かび上がってきたものは、脳や認知がモノの性質を決める、つまり人の中に心があるという従来の見方とは異なり、人と人あるいは人とモノの間に心が存在する、という見方であった。さらに、人は対象を把握するには、主体と対象との間に“モノ”や“手段”といった媒介を必要とするというヴィゴツキーの三角形のモデルを導入し、心がモノや人の間にあるという主張を根拠づけるとともに、そのモデルを現実の事象に適用した分析を示した。例えば、プリクラは自分と友人の媒介を可視化するものであること、サブカルにおけるセカイ系は、主人公と世界の媒介が空欄で直接両者が繋がってしまった構図であり、オウム真理教や秋葉原通り魔事件にも共通する危険な構図であることなどがヴィゴツキーの三角形で分析された。また、その中で、質的心理学の調査で用いられる半構造化インタビューやシャドウイングといった手法も解説された。最後に、コスプレ文化を例にとって正統的周辺参加論が説明された。正統的周辺参加論とは、文化的実践を共有あるいは占有することでその文化のメンバーとして認められるという理論である。そこからわかるのは、メンバーシップやアイデンティティーも個人の頭の中で完結しておらず、人やモノの関係の中に存在することであるという冒頭でも示された主張であった。

白井氏の講演で印象的だったのは、伝統的な心理学に対するアンチテーゼとしての生態学的妥当性、構成主義、質的心理学の内実が、様々な日常生活の事象を検討してなかなかで自然と理解できた点である。これは、それらの概念や捉え方が、我々の日常における実感をしっかりと掬い取れていることを示しているという点においても重要である。さらに、ヴィゴツキーの三角形で種々の現象が分析できることに驚き感心した。

しかし、対人関係や文化といった社会心理学的な事象における分析は納得がいく一方で、知覚や認知といった事象における分析には違和感が残った。たしかに、アフォーダンス理論は伝統的な心理学に対するアンチテーゼとして重要な概念だが、欠陥も多い。デイヴィッド・マーは、アフォーダンス理論を提唱したギブソンに対して、「生態学的妥当性の主張は尤もだが、実験室では様々な要素を統制することで心の機能を分析できる。それにアフォーダンスや直接知覚は実証することは難しい。」という批判を加えた上で、「計算論」というパラダイムを提唱した。視覚の研究には、ゴールである計算論、そのゴールを実現するアルゴリズム、アルゴリズムの神経回路への実装という3つの分析レベルが必要であるとする考え方である。心の記述の仕方がいろいろあるように、アルゴリズムも様々なものが想定可能である。しかし、神経回路への実装ということを考えるとアルゴリズムの選択肢は自ずと絞られる。この考えは、構成主義とも対立するように思われる。このような伝統的な心理学や認知神経科学からの再反論に対する批判、あるいはアウフヘーベンも白井氏から聞きたいと思った。

Review writer: 田中 大 (所属: 東京大学文学部行動文化学科心理学専修課程 3年)

$\text{G}_\epsilon^{\text{F}}$ (Group Epsilon) Central Executive Committee (CEC)
 $\text{F}_{\text{M}}\text{F}_{\text{k}}$ (Free Math Forum by kymst) URL: <http://kymst.net>
Subpage “Action of Group Epsilon”
URL: <http://kymst.net/index.php?GrpE%2Findex>
Contact us, mail to :-) kymstkymst@gmail.com

